2011年サバ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

			数								量				
年	漁	産	輸	輸	出	東京				在	加 工 品				消費支出
	獲	地	入	生冷	缶	生	冷	塩干	塩蔵	庫	缶	干	蔵	節	¶（口c）
22	478	433.8	76.4	120.4	2.9	9.98	3.3	2.7	0.4	65.7	28	21.3	48.2	16.5	1,292
23	365	329.9	60.0	97.9	1.6	9.92	3.2	2.8	0.5	64.4					1,166
%	76	76	79	81	55	99	98	104	116	98	0	0	0	0	90

			価		格				
年	産	輸	輸	出	東京				消費支出
	地	入	生冷	缶	生	冷	塩干	塩蔵	生（円）
22	78	211	84	373	391	472	463	511	1,101
23	89	245	90	349	383	492	458	480	1,038
%	114	116	107	94	98	104	99	94	94

漁獲と資源

23年のサバ類（マサバとゴマサバ）の漁獲量は、36.5万トンで前年（47.8万トン）をやや下回ったが、ほぼ近年の平均（50万トン）の水準であった。

マサバ太平洋系群の資源量は、1970年代には300万トン以上の高い水準であったが、1979年以降、時折みられる低いRPSによる加入量の減少と高い漁獲圧によって減少し、2001年には15万トンまで落ち込んだ。2004年以降は2004年級群の加入により増加して55万～87万トンで推移し、2010年は86万トンであった。親魚量が45万トン以上の1970～1985年では、年々のRPSは比較的安定し、加入量は年変化があるものの高い水準であった。親魚量が45万トンを下回った1986年以降では、RPSの変動が大きく、かつ親魚量が少ないために加入量の水準が大きく低下した。2010年の親魚量は17万トンと評価されている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1970・80年代は比較的高い水準で安定していた。1987～1990年に減少した後、増加傾向を示し、1993～1996年は110万～137万トンの高い水準に達した。1997年以降、資源量は急減し、2000～2007年は50万トン前後で推移したが、2008年は78万トンに急増した。2010年はやや減少し66万トンであった。加入量は近年では2004年にやや高い値、2008年にかなり高い値を示した。親魚量は1996年を近年の頂点に2003年まで減少したが、2009年に急増した。再生産成功率は1991年以降、比較的高い値を示していて、1995、2004、2008年にかなり高い値を示している。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源量は、1995～2010年の資源量（７月時点）は、1995年以降の比較的安定した加入量の継続と２度の卓越した高い加入量によって30万トン前後から2004、2005年には60万トン以上に達する高い水準にある。2006年以降は減少したが、2010年は2009年級群の高い加入量によって55.9万トンと依然として高い水準にある。2011年の資源量は、加入量を直近の調査船調査から8億尾と推定し、2010年の値から前進法で推定すると49.6万トンと推定している。

また東シナ海系群のゴマサバの資源量は1992～2010年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、資源量は2005年に19.0万トンと高い値を示したが、その後は減少傾向を示し、2008年は11.3万トンであった。2009年以降はやや増加し、2010年の資源量は13.2万トンであった。加入量は近年では、2004年にやや高い値となったが、2005年はやや減少し、その後は横ばい傾向を示している。2004年の高い加入量のため、親魚量は2005年に増加した。

その後は再び減少傾向を示していたが、2010年は2009年に比べてやや増加した。再生産成功率は、1993、2004年に高い値を示した他は、比較的安定している。

産地水揚量と価格（継続漁港）

23年の産地水揚量は、33万トンで震災等による北部太平洋海域と東シナ海での漁の遅れ等を反映し、前年（43.3万トン）を下回った。

価格は、生産の減少したことを反映し89円で前年（78円）を上回った。

海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量の特徴は、太平洋側の三陸・常磐が震災の影響もあって低調、山陰、薩南がやや好調であったが、東シナ海も漁期のずれ等もあってやや低調であった。道東海域では、本年も巻き網による漁獲はなかった。

海域別漁獲量

海　域	22年	23年	対比（%）
道　東	0.0	0.0	－
三　陸	92.2	56.6	61
常　磐	105.8	53.1	50
東　海	68.3	63.8	93
薩　南	19.0	26.7	141
東シナ海	109.2	86.7	79
山　陰	24.3	28.7	118
その他	18.2	13.7	75
合　計	437.1	329.4	75

三陸（単位:1 00 0トン）				常磐（単位:1 00 0トン）		
月	22年	23年		月	22年	23年
1	3.5	1.2		1	17.4	12.9
2	0.5	0.4		2	7.1	2.6
3	0.0	0.2		3	0.2	1.2
4	0.0	0.0		4	8.3	0.4
5	0.0	0.0		5	2.9	0.0
6	0.1	0.0		6	6.0	2.9
7	7.0	4.9		7	4.0	0.6
8	9.1	6.5		8	2.0	0.0
9	15.4	12.7		9	5.7	1.5
10	33.4	10.8		10	2.7	7.1
11	13.8	15.8		11	23.6	12.4
12	9.3	4.1		12	26.0	11.4
計	92.2	56.6		計	105.8	53.1
	MAX　H5 3　69 万トン				MAX　H6　1 4. 1万トン	

三　陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年以上に低調で、南下期も低調で昨年を下回る漁獲にとどまった。

本年は福島原発の沖合は操業を自粛したことを受け例年とは違った操業となったが、７月下旬に八戸近海でマサバ・ゴマサバの初漁があり、昨年より遅い12月まで漁獲がみられた。

また本年も７月下旬からまき網によるスルメイカの漁獲が始まり、11月まで続いた。漁獲は昨年の約13,000トンを下廻る約9,200トン（小型まき網31トン含む）であった。

魚体は、当初２歳魚（2009年級群）主体、後半は1歳魚も混じるようになった。

また、本年のブリ（イナダ、ワカシ）の漁獲は、昨年同様10月にピークがみられたが、12月まで続き漁期が長かった。しかし水揚量は、過去2年を下回る水準に終わった。

常　磐

この海域は、放射の漏れの影響で操業を回避した海域が含まれており、操業がかなり制約された。本年の越冬サバ漁はやや低調に推移し、17.1千トンの漁獲で前年（33千トン）をかなり下回った。

また、春（５～７月期）の北上期の漁獲はで3.5千トン程度に終わり前年（12.9千トン）を大きく下回った、南下群の漁獲は30.9千トンで前年（52.3千トン）をかなり下回った。

なお本年も北部太平洋海域では資源回復計画に基づく休漁や時化等も多く操業はかなり制約された。

なお、本年のブリ類（イナダ、ワカシ）の漁獲は、年明け後の1月と年末12月に集中してみられ、近年では最も多い水揚げを記録する豊漁であった。

魚体は、越冬群はほぼ１歳魚（2010級群）主体であったが、北上期には２歳魚（2009年級群）も３－４割混じり、南下期は、当初の１歳魚から２歳魚（2009年級群）へ変わり後半はそれに３歳魚（2008年級群）も混じって漁獲された。本年はゴマサバの混獲が目立ち、時に南下期にはゴマサバが多かった。

東　海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、昭和54（1979）年の17.7万トンをピークに減少しており、近年においても概ね１万トン以下の低調な漁獲で操業隻数も往時に比べ大幅に減少している。なお本年の漁獲は2,762トン（前年：1,794トン）で前年を上回ったが、近年でも低調な部類に入っている。

23年の漁獲量は、マサバが1,587トンで前年（891トン）を上回り、ゴマサバも1,177トン（前年：902トン）でマサバ、ゴマサバとも増加した。

東シナ海（単位:100 0トン）				山　陰（単位:100 0トン）			
月	22年	23年		月	22年	23年	
1	14.6	12.6		1	3.7	5.0	
2	7.5	10.7		2	3.0	2.3	
3	2.1	4.4		3	1.2	2.7	
4	1.0	2.2		4	0.4	1.3	
5	3.2	3.0		5	0.2	0.4	
6	2.0	3.0		6	0.3	0.1	
7	2.5	2.0		7	0.2	0.5	
8	2.8	4.2		8	0.2	0.5	
9	5.2	6.5		9	0.4	1.3	
10	17.2	8.5		10	2.6	2.3	
11	28.9	10.0		11	8.4	4.7	
12	22.4	19.6		12	3.9	7.6	
計	109.2	86.7		計	24.3	28.7	
	ＭＡＸ　Ｈ８　２２．２万トン				ＭＡＸ　Ｈ６　１４．１万トン		

東　シ　ナ　海

23年前半の年明け後の冬漁はやや低調で昨年並みに推移し、また夏場の閑漁期の漁も前年なみであった。９月以降本番に当たる冬の盛漁期には12月に少し盛り上がった程度で、他の月は極めて低調に推移し、水揚げも前年を大きく下回った。したがって結果的には全漁期特に冬場の盛漁期の大不振を反映し昨年を下回る水揚げになった。

山　陰

この海域で漁況は、年明け後の漁が前年を若干上回ったものの、閑漁期の夏場の漁も平凡な漁、しかも秋漁以降も前年並みの漁で、その結果水揚げは前年をやや上回った程度であった。

魚体は、2010年級群が主体であった。

輸　　入

本年の輸入量は、６万トンで、前年（7.6万トン）をかなり下回った。本年のノルウェーからの搬入は、東日本大震災の翌月の４月のみ昨年同期に比べると３倍増になった他は、各月とも減少したことを反映したものである。本年の搬入ピークは昨年同様11月集中型であった。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーのシェアが94%とほぼ全量ノルウェーと言ってもよい程多い。また、それ以外の国では中国が1,132トン（前年：180トン）と大きく増加し、カナダ、アイルランドが、それぞれ671トン（前年：902トン）、935トン（前年：603トン）、イギリスは皆無（前年：98トン）であった。

本年のノルウェーからの輸入原料は600サイズ以下が94%（前年:92%）主体に600gUPが６％（前年:８％）で、シェアでは600gUPが本年も更に減少し、600g以下が増加している。また600gUPを始め日本とロシア、中国等諸外国との競合関係が顕著になっているが、本年は、ノルウェーサバを巡っては600gUPサイズでは、買付価格の日本側の優位（３－４クローネ他国より高く買っている）が目立ちシェアも依然多い。

価格は、245円で前年（211円）を上回った。

また、中国（約７割）、タイ（約３割）等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多いが、本年も11,060トンで前年（8,139トン）を引続き伸びている。

輸　出

本年の輸出量は、国内生産の減少、東日本大震災の影響（原発）や「アラブの春」等政変の影響もあって減少し再度9.8万トンで前年（12万トン）を下回った。

この結果、本年はエジプトへの輸出が少なくなり、タイ、ベトナム、フィリピン、韓国、中国、エジプトの順に変わり、依然東南アジア諸国の伸びが著しい。また、缶詰輸出は1.6千トンと前年（2.9千トン）を震災で缶詰工場の被災の影響等、生産が落ち込んだこともあってか引続きかなり下回った。

在　庫　量

在庫量は、6.4万トンと前年（6.5万トン）を若干下回った。

これは、輸出量の減少もみられたが、国内生産・輸入量の減少がより大きく反映された結

果である。

消費地入荷量と価格

23年の東京消費地入荷量は、生鮮が1万トンと前年（1万トン）並みであった。

また、冷凍は3.2千トン（前年：3.3千トン）、塩干2.8千トン（前年：2.7千トン）、塩蔵0.5千トン（前年：0.4千トン）であったが、本年は震災の影響で日持ちのする塩蔵品・塩干品の需要が出たことで前年を上回った。生鮮、冷凍はほぼ前年並みであった。

価格は、生鮮383円（前年：391円）、冷凍472円（前年：492円）、塩干458円（前年：463円）、塩蔵480円（前年：511円）で、冷凍原料がノルウェー物の高騰で上昇したが、他はやや弱含んだ。

また、本年も消費地市場、末端のスーパー・量販店では、時期によってはゴマサバが恒常的に販売されるようになり、鮮魚販売や、加工品にもかなり利用・定着している。なお消費支出をみると数量、金額とも減少した。